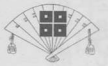




歴史を尊ぶ者は未来が読める。



まるがめ

資料館だより



発行所/
丸亀市立資料館

香川県丸亀市一番丁（城内）
電話（〇八七七）二二一五三六六
FAX（〇八七七）二五二四三九

市指定有形文化財



千歳座

瀬戸内海のほぼ中央の備讃海峡に、大小二八の島々からなる塩飽諸島があります。その中心となるのが本島で、江戸時代の政所である塩飽勤番所や、古い町並みが残る笠島をはじめ、歴史、文化財の宝庫として有名です。

その中の一つに泊港近くの木鳥神社があり、本島泊地区の産土神社として崇敬されています。境内の奥には、市指定文化財の千歳座があります。

千歳座は、江戸時代に建てられた芝居小屋で、全国で特に重要な舞台の三〇件の一つに数えられています。江戸から明治・大正時代にかけて、村人が芝居を演じたり観たりして楽しむ地芝居が庶民の娯楽として、全国の農山漁村で流行りました。ここ千歳座でも、麦の収穫期や秋祭りに芝居が行われていました。

時代の経過とともに建物も老朽化していましたが、平成元年に全面修復され、文化財として整備されました。

本島の芝居小屋千歳座

入江 幸一

本島の港に上陸して、海岸沿いに左の方向へ五分程歩くと、木鳥神社の大きな石鳥居の前に出る。この神社の境内には、丸亀市指定の文化財が三点ある。

一つは、寛永四年（一六二七）に塩飽の年寄宮本伝太夫の子息半右衛門が寄進した石鳥居で、笠木の両端が丸く盛り上がっているのが、他には見られない特異な姿である。

鳥居の横に建つ間口五・五m、奥行一・八mの小型の建物は制札場といい、江戸時代に塩飽を統治した勤番所から、触れ書・掟などを住民に周知した掲示場の名残である。そして、社殿の西南側に隣接して建つ木造建築が、今回紹介する芝居小屋千歳座で、地元では定小屋と呼んで泊自治会が管理している。間口一七・四m、奥行八・三mあり、拝殿前の広場を観覧席に使用できるよう東面して建っている。棟札により文久二年（一八六二）八月十五日に上棟したことがわかる。

本屋の東面は舞台正面となるため中間に柱を建てず、広い開口とし、この開口いっぱい、幅〇・七六mのぶちようと呼ぶはね上げ式の突き出し舞台を設ける。普段はこれを上げておき、その上に十二枚の雨戸で戸締りをする。使用時には、雨戸を開けてぶちようを倒せば一〇・九mの舞台となる。

中央に回舞台を装置し、天井には雪や花を散らしたり、幕などつるすために、丸竹を格子状に組んだぶど

う棚がある。舞台の南北両面には中二階を設け、それぞれをチヨボ座、ハヤシ座としている。興行時には舞台の南端から客席側に花道を付けた。芝居小屋に必要なものは完備しているが、楽屋は神社の拝殿を利用した。

利用した。

中央の回舞台は、直径七・九mあり、琴平の金丸座より大きい。回舞台の周縁下には「ころ」があり、この軸をしなければ材で繋いでいる。回舞台は、下の奈落に入って上から下りる棒に肩をあてて回すものが多いが、千歳座の回舞台は、奈落の中央を大きな土饅頭型に堀り残して、頂上に石製の軸受けを置き、回舞台を受けた皿回し式で、回転させるには、舞台の隅の柱に肩をあててふんばって回す様式になっている。

泊人名会所有の「木鳥宮道具納屋請払勘定帳」は、千歳座建設当時の金銭出納簿で、これによると千歳座の内容は常設の芝居小屋でありながら、名目は神社の道具納屋（倉庫）として建てている。これは幕府の禁令に配慮したものか、あるいは実際に神社の祭礼道具の一部を格納しているためであろう。

建築は泊の大工棟梁中張佐太郎が、銀三貫六九八匁四分で請負い、小工七人を使って文久二年八月に上棟し、十月の祭礼には柿落しの興行を開催している。



千歳座の舞台

明治の頃までは、地元の若者が毎晩練習した成果を秋の祭礼に実演した。盆に帰省し出演が決まると、出稼ぎに行かず島にとどまって練習に余念がなかったという。

振り付け師、衣装方、はやし方などは他から雇ったので、興行には多大の費用がかかったため、役員の許可がおりず、毎年行えなかった。小屋の中に、文久二年八月、明治十三年三月、同十五年旧八月、同二十一年九月、同三十年三月に興行した際の落書きがある。大正・昭和期には、旅芝居の一座を招いての興行が多かった。昭和十六年から二十四年までは、農村文化運動の一環として、青年団員による演劇活動が盛んで、毎年秋祭りに演芸会が開催されていたが、その後長年にわたって小屋を使用することはなかった。

終戦時に海軍の兵器を千歳座の中に隠匿したため、過重によって回舞台を破損したり、建物が老朽化したので、平成元年に丸亀市の助成によって復元工事が行われた。

同年八月一日、落成を祝う柿落しの公演に中村富十郎、澤村藤十郎、市川團藏等江戸歌舞伎の名優がそろって舞台をふみ、大勢の観客を集めて盛大に開催された。これが、千歳座の最も華やいだひとときであった。この機会に座紋を「丸に一つ松」と設定したのは泊地区の古名が「松ヶ浦」であったことにちなんだものである。

その後公演のときもなく、現在では毎年本島合同文化祭に舞台部門の会場として使用されるにとどまっている。

参考文献 普請研究第十七号 千歳座（普請帳研究会）